距離についての覚え書き

1987 年『個展』(真木画廊)展ﾃｷｽﾄ

自分が今、目の前にある物たちとの間に見ている距離は、どれほど確からしいものなのか、ふと疑いだすと次第に思いが偏執的になる。例えば遠くに見えている山々と自分とが、どれほど隔たっているのか。稜線の明瞭さや色の具合などから推し測ろうとするが、間近に見れば圧倒されるであろうはずの大きな山が、か細い線となったり淡い色調となって見えているのだから余程遠いのだろう、というのは当たり前の判断だが、しかしじっと見つめているといつしかか細い線はか細い線として、また淡い色調は淡い色調として間近に見えてきたりする。一体自分はどれほど山との距離を実感しているのか。

距離を測る方法としてメートル法がある。地球の子午線の約 4 千万分の 1 に当たるメートルという単位を基準として、距離を客観的な値とすることが、メートル法では可能である。視覚で判断された距離が常に曖昧で当てにならないのに対し、メートル法による客観的な値は常に正確である。

しかしこんな話も聞く。地図上に描かれた海岸線の長さの値は、測量の精密度が増すほど無限大にのびてゆくという。これは測量技術の習熟度による誤差の問題ではない。客観的な測量が行きつく結果である。しかし客観的な値が無限大にのびてゆくことに困惑を覚えるのも確かである。なぜなら客観的な値は曖昧である視覚などの感覚を補正すべきものであるからだ。しかし結局のところ、それら両者はそれぞれ世界の異なった位相に属するのだ、と言わざるをえない。

例えば絵画における距離について考えてみる。何もない平面上に距離を感じるというのも不思議なことだが、その中にも客観的な距離の概念はいつの間にか入り込んできて、透視図法という様式を完成させた。透視図法による絵画空間は、消失点を最奥部とした客観的な物の羅列である。この様式は絵画が平面であることを忘却することで完成する。つまり絵画が平面であることをしばし忘れて、透視図法によってあらわされた遠近の世界を見入ることによって、世界が再現されるのだ。しかし視覚は常に曖昧で、絵画の表面と奥行きとの間を行きつ戻りつする。そんな視覚にとって、完璧な透視図法であらわされた世界は不自然であるか、あるいは異なった位相の世界であると、言えないだろうか。

曖昧な視覚の中にあって距離を見極めようという営みが嘗てなされた。その顕著な例がセザンヌとジャコメッティである。彼らの営みは、当然のことながら客観的な測量とは無縁であったから、距離を疑ってみることよりも、さらに偏執的な営みとなる。その結果に到達するヴィジョンは、物の遠近を比較によって羅列するのでなく、物との間に絶対的な近さ—あるいは遠さと言っても同じであろうが—を見出すものであるらしい。セザンヌの言葉を直後、引用した方が良さそうだ。

「オレンジでもリンゴでも球でも顔でも、そこには一つの頂点がある。そしてこの点は光や影や彩られた感覚がおよぼす恐るべき影響にもかかわらす、われわれの眼に最も近い。物の周縁部は水平線上におかれた一中心に向かって逃げてゆく。・・・・」